

# 日本人と博物学

## 尾本恵市

おもと けいいち / 1933年東京生まれ。東京大学および国際日本文化研究センター名誉教授。総合研究大学院大学・葉山高等研究センター・シニア上級研究員。専門は分子人類学、アイヌおよびフィリッピン先住民ネグリの遺伝的起源を解明した。著書『分子人類学と日本人の起源』(裳華房)、『ヒトはいかにして生まれたか』(岩波書店)など。

人類学者としてのわたしの原点は、昆虫少年だった子どものころにさかのぼる。物心ついたころ、土堀にまわって羽を開閉していた蝶の美しさに見とれ、父が買ってくれた図鑑でルリタテハという種類と知った。小学校でのあだ名は昆虫博士で、中学、高校でも蝶集めに没頭し、いずれ生物学者になってダーウィンのように進化を研究し、またヒマラヤの奥地で新種の蝶を発見することを夢見ていた。大学で人類学を専攻するようになってからも、蝶の蒐集・研究は趣味として続け、前述の夢もほぼ果たすことができた。

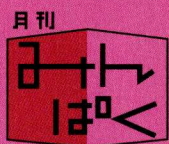
ところで、世界で昆虫少年がいちばん多い国は日本ではなからうか。昨今は蝶よりクワガタムシなどに人気があるようだが、専門業者が主催する昆虫販売会で小・中学生など若年の客が多いのに驚かされる。一方、歴史的に博物学の本場といわれる欧米では、蒐集家はほとんど中・高年者で、日本のように大勢の昆虫少年がいるとは思えない。図鑑類や同好会の数とレベルでも、日本は世界で抜き出ている。これは何故であろうか。

じつは、日本には江戸のむかしから博物愛好家が多かった。そのルーツは中国の本草学、つまり薬用植物の知識であったが、日本ではそれが独自の発展をとげ、対象は必ずしも人間の役に立つ動植物に限らず、むしろ

忠実な自然描写と芸術的な美を重視する独特の博物学になった。一例をあげれば、中国には多数の蝶を描く「百蝶図」があるが、どの蝶も幻想的で写実性がない。それに対し、丸山応挙の百蝶図(一七七五年)では、個々の蝶を現在の種として同定できるほど写実的で、かつ全体の構図が美しい。

最近、酒田市立図書館の光丘文庫で松森胤保の『両羽博物図譜』を見る機会をえた。鳥獣、魚介、昆虫を網羅する自筆彩色画の膨大な量と正確な描写にまず圧倒されるいのみおび磯野直秀氏の解説で作者の人となりを知って驚嘆した。彼は、庄内藩の武士で、後に家老、明治維新後は政治家として活躍したが、少年時代からの趣味の博物学でも、対象の広さ、精確な記録と写実画で卓越していたうえ、独自の自然哲学を発展させた。六〇歳近くになって採集したオオムラサキ雌雄の図は、すばらしい出来栄だが、そこに記された採集の苦心談を読むと、まさに老昆虫少年の面目躍如である。

日本人に昆虫少年が多い理由は、江戸時代の博物学の伝統が現代に引き継がれているからかもしれない。博物学は、子どもの自然への好奇心から発展するもので、自然を愛する原点となる。近代生物学の名のもとに、この感性を阻害するようなことがあつてはならない。



### 目次

JULY 2007 7  
月刊みんぱく

01 エッセイ 世界へ世界から  
日本人と博物学  
尾本 恵市

## 02 特集 化粧

現代化粧文化事情  
玉置 育子

これからは「スロービューティー」  
石田 かおり

社会現象としての中国の化粧  
韓 敏

### 舞台上化粧をする芝居

鶴岡 正樹

ピンディで「女」になる

松尾 瑞穂

白化粧の「新成人」

石田 慎一郎

08 モノ・グラフ

綿入れ文化

高橋 晴子

10 地球ミュージアム紀行

古城と河と博物館と

佐々木 利和

11 表紙モノ語り

盤上遊戯を楽しむ首長たち

阿久津 昌三

12 みんなでインフォメーション

万国津々蒲々

みんなで「共有」

福井 栄二郎

15 時論・新論・理想論  
アイヌ文化と学校教育、そして博物館  
加藤 謙一

16 外国人として生きる  
先住民アボリジニと共に、  
赤土の大地に暮らす  
黒田 智子

18 地球を集める  
ギターに刻まれた歴史  
笹原 亮二

20 生きもの博物誌  
サバクバッタの異常発生  
石本 雄大

22 フィールドで考える  
水浴びの作法  
飯岡 有佳子

24 開館30周年記念事業のご案内  
次号予告・編集後記

# 化粧

化粧をすることで、自己主張したり、また個性を埋没させたりもする。その役割は、文化や社会情勢などによってさまざまだ。特集では、人びとにとって化粧とは何か、について考えてみたい。



## 現代化粧文化事情

玉置 育子

(たまき やすこ)

大阪樟蔭女子大学講師

女性の多くは化粧をしているにもかかわらず、「化粧」を人から学んだ経験のある人は少ない。それなのに何故だか自分の顔に化粧ができる。

むかしは、高校にメーカーが赴き卒業直前の女子高生に化粧法を教授していたという。しかし現在は、化粧法を学ぶ場はカルチャーセンター、もしくは百貨店の化粧品売り場であり、化粧の先生はメイクアップアーティストや百貨店の美容部員といったところだろう。化粧を学ぶ場として専門学校は？という意見

## これからは「スロービューティー」

石田 かわり

(いしだ かわり)

駒沢女子大学准教授



もありそうだが、専門学校はもっぱら他人に施す化粧法の習得に特化しており、自分の顔を化粧することは少ないようだ。現在、女子高生が化粧をしていても驚かない時代であるにもかかわらず、「化粧」を学べる場所は少ない。お笑い芸人の故岡八郎の「オレなあゝ、空手習ってん。通信教育やけどな」というギャグがあつたが、化粧はそれに近いものがある。雑誌を手にとり、掲載されている化粧品を参考にしよう見まねで自分の顔に化粧を施していく。化粧とは恐ろしく、そして皮肉なもので学習成果が自分の顔に残る。癖として残り続ける。ときには、その学習成果が時代に合っていないと「流行おくれ」とレッテルを貼られたりすることさえある。ふたつとして同じ顔はないので、化粧法はオーダーメイドであつてもいいはずだ。そうすべく、自分の顔に合った化粧を日々手さぐりて探している状態なのだ。

テレビをつけると、化粧品のCMを見ない日が無いくらいに情報はあふれているが、わたしたちは化粧についてこれまで「学ぶ機会」がほとんど無かつた。もちろん、大学などで化粧を学ぶなんて言語道断だつた。

## 多様な学問からアプローチ

大阪樟蔭女子大学では二〇〇七年度

に日本で初めて化粧文化専攻を設置した。被服学科の一専攻として位置づけられ、被服と化粧を併せてトータルファッション的に学ぶことを目的とし、次のように多様な学問から化粧を学べるよう将来像を描いている。

美の哲学を学ぶ「美そのものの研究分野」や、化粧文化論、身体装飾論、化粧心理学、美と経済学・政治学を学ぶ「美と個人あるいは美と社会の関係の研究」、メイクデザイン実習をする「美の創造としてのアート活動分野」、化粧品学、皮膚科学を学ぶ「化学的研究分野」など多岐にわたる。

つまり、化粧法の技術だけでなく、「化粧」を哲学、社会学、文化人類学、経済学、政治学、心理学、芸術、化学的視座から学ぶということである。今後、さらに様々な学問から化粧へのアプローチが可能だろう。美しさを押し付けるのではなく、化粧に対して観察力、客観的な視座を養いながら、学生とともにこれからの「化粧文化」を切り拓いていきたいと思つている。学問のエッセンスを融合させ、化粧の多面性を学ぶ場を提供できればと考えている。

化粧は幅が広い、奥も深い。その広さと深さを面白いと思つてもらえれば幸いである。

昨年からマスコミを賑わせている議論に、ファッションモデルの痩せすぎがある。若い女性の極端な痩せ願望や過剰なダイエットを煽つているとして、BMI(値)（痩せや肥満の指数）による制限が設けられた。スペインとイタリアがこれに従つて指数で痩せすぎのモデルのショーへの出場停止を実施し、それに対する賛否をめぐる議論が起きた。これはファッションモデルが美容の手法になつていることを物語っている。

読者のなかにもおしゃれに目覚めたころ、流行のタレントや活躍中のスポーツ選手など、人気者の髪型・化粧・服装を真似た人も少なくないだろう。誰でもおしゃれの始めは人まねだ。人まねをしているあいだ、手本は自分の外にある。つまりこの時期のおしゃれとは、個人の外にある価値基準に自分を合わせる努力である。しかし経験を積むうちに、あるいは加齢にともなう諦めや開き直りも加わつて、いつの間にか人まねから脱するようになっていく。

## 不自然なファストビューティー

しかし、最近はそのもいなくなつた。「若くなければ美しくない」と思う人が多数派になり、同世代にもかかわらず二〇歳も四〇歳も若く見えるタレントや美容のブクを目標に、美容に励む傾向が強まっている。これは女性だけではない。大部

会に住み、高収入のおしゃれに熱心な男性「メトロセクシャル」の登場以来、男性も同じ状況だ。現在アンチエイジング(抗老化)は、美容と健康の最大の目的と市場になっている。ここでもまた、個人の外にある価値基準にいかにか自分を近づけるかの努力がなされている。しかも、生物にとって自然現象である加齢を問題視し、「解決」する方向性なので、外見格差や老人差別に結びつく傾向も見え始めている。

二〇世紀の生産・流通技術と経済発展にともなう化粧品や健康用品とその情報の普及により、画一的価値に基づいた美容が急激に進み、その結果即効性と若さを求める傾向が強まつた。この「ファストビューティー」は、生物としての自然現象に逆行する意味でも、自分がつて生まれた資質と人生経験により培ってきた要素を無視するという意味でも、「不自然な」美容だ。

だからこそ「自然な美容である」「スロビューティー」が、人がよく生きるために必要ではないのか。人それぞれ、年それぞれ、その美しさ。価値基準を個人に内在化させ、しかも人生の歩みに沿つて毎年変化する基準、それが社会と個人における美の多様性を生み出し、誰も窮屈な思いをせず、生きられる社会の実現にも結びつくとしたら信じて、二〇〇三年秋から「スロビューティー」の提唱と普及活動と、そのための研究をしている。

# 社会現象としての中国の化粧

韓 敏  
(カンビン)

本館民族社会研究部

中国の長い化粧史のなかで、女性の化粧のポイントとは主として顔であり、耳と首もその範疇に入っていた。顔の化粧は基本的には、おしろいを塗り、頬紅と口紅をつけることである。そのなかで顔の白さは化粧の原点であり、今でも「白遮百醜(イバサハクハクイ)

化粧法が流行っていた。二〇世紀に入り、フランスなどの西洋化粧品や欧米の映画が中国にもたらされ

るとともに、アイシャドーやアイラインを入れる立体感のある欧米型の化粧法も知られるようになった。しかし、中国の女性たちにはあまり好まれなかったようである。二〇世紀の半ばまでは、「白」を基本とする細い半月の眉毛と丸顔は依然として化粧の主流をなしていた。

一九五〇～一九七〇年代までの毛沢東時代では、数千年の歴史をもつ女性の化粧は次第に中国から消えてしまった。革命によって、女性は生物学的意味や家庭や親族の關係から捨象され、政治的存在として表象されるようになり、男性と同じように社会進出する、社会主義建設のための貴重な労働力であるべき存在となった。そのため、社会主義革命につながるに生産性のない女性の化粧はブルジョア的、搾取階級の生活様式とされ、批判の対象になった。

「毛主席万岁」というタイトルのポスターは女性がイヤリングをし、翡翠のブローチを付けたというだけで、各地で批判されていた。「不愛紅装愛武裝(華美な化粧と衣装を飾るより、祖国を守る服装を愛す)」という毛沢東の有名な文句は革命時代の中性化、あるいは男性性化された女性像を適切にあらわしている。そのころの化粧を施さない女性にとつて、唯一手に入る美容品は上海で製造された「雪花膏」とよばれるクリームであった。

## 多様化する化粧

一九八〇年代から女性の化粧は徐々に回復され、化粧品の増加とともに、女性像も多様化し、古典的で清楚なものほかに個性、知性、野性、自信、反抗心、セクシーさ、健康さなどを強調したもの

のもあらわれている。一九九〇年代に入ると、大都会の女性化粧のイメージの変化は、ほぼ先進国と同時進行するようになっていくが、先進国と比べて、化粧は二〇～四〇年代までの裕福な女性に集中するところが中国の特徴である。



武漢のある新婚夫婦。働いている彼女の化粧は古典的な清楚さ、自信と知性をもち合わせている  
2001年



国慶節の場面を描いたポスター、「毛主席万岁」。作者 哈琼文 1959年

## 舞台上化粧をする芝居

鵜飼 正樹  
(うかい まさき)

京都文教大学准教授



舞台上化粧する筆者



劇中劇「忠臣蔵 松の廊下」。浅野内匠頭を演じる筆者(左)

大衆演劇に、舞台上化粧をする芝居がある。通称「旅役者の一夜」。同じ芝居が、わたしの師匠の劇団で上演されるときは、「師弟愛」という題名になる。

時代は大正から昭和初期であろうか。ある地方の旅回りの一座に、東京の大歌舞伎の名題(幹部級の役者)が賛助出演することになった。しかし、一座の座長は病気のため、相手役として舞台上立つことができない。そして、久しぶりに座長を楽屋に訪ねてきた弟子が、いきよ、代役を務めることになる。

弟子が素顔から化粧をし、衣装を着ると、劇中劇の幕が開く。劇中劇は、「忠臣蔵」や「加賀見山」など、とにかく名題が敵役を演じ、弟子を徹底していじめる芝居がいい。

大衆演劇といえば、主流は股旅時代(またたび)剣劇であるが、こういう芝居も、ときには上演される。わたしの好きな芝居のひとつである。

じつは、わたしは昨年、この芝居の主演を演じた。「南條まさき芸能生活二十五周年記念リサイタル」と銘打った公演の芝居が、この「師弟愛」だったのである。

まず心配だったのは、化粧のスピードだった。わたしが舞台上化粧をしているあいだも、芝居は続いている。ほかの人が芝居をして、間をもたせてくれている。だが、それにも限度がある。わたしに許される時間は、一五分以内。はたして、観客の目の前で、スポットライトを浴びながら、そんな短時間で化粧できるのか。

結果からいえば、けっこう余裕があった。あとからビデオでチェックしてみると、化粧に要したのは一二分くらいである。

## キャリア積むほど速く

役者として弟子入りして、最初の化

粧は、先輩にしてもらった。化粧品が臭く、スポンジではたかれた顔が痛く、あとからかゆくてしかたがなかった。ひと月もすれば、自分で化粧をするようになったが、「なんじゃその顔は」とよく笑われた。ようやくそれなりにマシンな化粧ができるようになったのは、半年ぐらい経ってからである。

大衆演劇の化粧は、そのルーツである歌舞伎と共通するところが多い。ただ、大衆演劇の出しものは日替わりだ。昨日は女形、今日は老け役、明日は敵役と、日ごとに化粧を変えて芝居する。化粧が遅いようでは、やっていけない世界である。

わたしはもちろん、二五年のあいだずっと舞台上立ち続けてきたわけではない。一年間のべ一〇日も立つか立たないかというところだ。それでも、いつの間にか化粧が速くできるようになっていた。芝居の出来より、化粧の速さにこそ、わたしの芸能生活二五年のキャリアがあらわれているといえるのかもしれない。

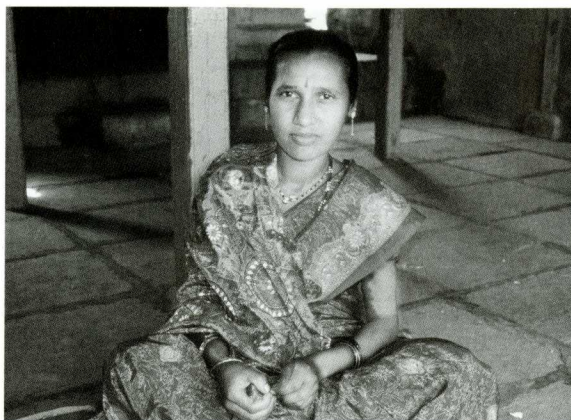
さて、「師弟愛」のその後の展開だが、それは大衆演劇の劇場に足を運び、芝居をご覧になってのお楽しみと、させていただきたい。

## 化粧

特集



色とりどりのピンディ(シール)は  
雑貨屋などで手に入る



赤いピンディを付けたヒンドゥー女性



## ピンディで「女」になる

松尾 瑞穂  
(まつお みずほ)

本館外来研究員

を除いてほとんど化粧をしない人が大半である。こうした女性たちにとっては、朝の沐浴のあとに、粉おしろいを顔にはたいて、額の真ん中にきちんとくるように慎重にピンディを付けることが、日常的な「お化粧」である。最近では赤色のほかに、ビーズが付いた豪華なものやカラフルなシールなど数百種類もある。10枚ほど入った1シートで100〜300ルピー(約300〜900円)と手ごろなので、若い人のあいだでは、その日のファッションに合わせて、毎日違う色のものを付け替えることも流行っている。ピンディを付けた顔を見慣れていると、夜寝る前などに付けていないのを見たときには、何か違和感があるほどだ。

### 「女性」たらしめる

ピンディをめぐっては、印象的な思い出がある。わたしが村に住んでいたとき、女性たちを集めたワークショップに参加したことがあった。一人の女性が床に手足を広げて寝転び、身体のかたちをチョークでなぞる。残された人型を前にして、「男女の違いは何?」とNGOスタッフが尋ねると、一人の女性がチョークを手にとり、真つ先に額に丸い印を付けた。たつたそれだけで、性別のない人型が一瞬にして「女」となったのである。毎朝鏡の前でピンディを付ける、そんな日常のお化粧が、インドの女性を女性たらしめているのかもしれない。

あなたが女性だとしよ。朝目が覚めたら遅刻寸前である。いつもはきちんとメイクをしているのに、今朝は時間がないとしたら?こんな質問に、とりあえずファンデーションを塗る、あるいは何はなくとも眉毛だけは描かなきゃ、と答えるかもしれない。わたしがつきあっているインドのヒンドゥー社会で同じ質問をしたならば、きつとほとんどの女性がこう答えるだろう。「ピンディ!」。

ピンディとは、女性の額の真ん中にほつんと付いた赤い染料を用いた印やシールのことである。もとは既婚女性の象徴であるが、今では若い女性もおしゃれとして楽しんでいる。ムンバイのような大都市で会社勤めをしている女性たちは、美容院で眉毛を整えてもらい、口紅やチークなどで化粧をすることもあるが、ふつうは結婚式など

## 白化粧の「新成人」

石田 慎一郎  
(いしだ しんいちろう)

本館外来研究員

男に率いられ、村中を駆けめぐる。ピーツ、ピーツと、乾いた笛の音のみを連発し、ことばになる声はいっさい発しない。仮面男は、商店に押しかけては、笛の調子に合わせて手のひらを差し出す仕草で無心する。続く白化粧は、棒切れを振り回し、遠巻きの子どもたちを威嚇する。どちらの顔も、誰だかわからなくなっている。こうして「新成人」の個は埋没するが、一行全体は引きたつて見える。

割礼は、おとなの男になるために必要なステップのひとつである。少年たちは、割礼を済ませると、しばらくのあいだ隔離小屋で身を潜め、傷が癒えるのを待つ。そして、いよいよ「新成人」として姿をあらわす。こんにち、お披露目のやり方は、割礼方法に応じてふたつにわかれる。村の割礼師が施術した場合、「新成人」は前文のように白化粧であられる。他方、病院で割礼手術を受けた場合、「新成人」は、新しい衣服に身を包み、披露宴の主役としてあらわれる。

仮面男に率いられた白化粧が駆けめぐるあの場面は、わたしにとつては、どれも写真に収めたくなるものである。公の場に姿をあらわしたところなのだから構わないのではないかと思ってしまうが、カメラを向けてはならない。絶対にやめなさいと、みながわたしに忠告する。むかしながらの割礼は、その多くの部分が当事者のみぞ知る秘密とされているからである。



新しいタイプの割礼を受けた「新成人」。  
披露宴は写真撮影可能だ



伝統的な白化粧の「新成人」を  
遠巻きに見る子どもたち

### 個を埋没させる

ケニア中央高地メル民族の調査を始めてから、まる六年経った。村人とのつきあいが進むと、卒業式や結婚式など、それぞれの人生の節目を祝福する式典に参加する機会が増えてくる。よいカメラをもっているという理由で、撮影係を引き受けたこともある。そんなこともあって、華やかに身繕いした村人のスナップをたくさんもっている。

一方、強く希望しても、撮影が許されない人生儀礼の「コマ」がある。伝統的な割礼を済ませた男の「新成人」の一斉お披露目の場面だ。一行は、短パンひとつで、しかも顔から脛の先まで白い泥を塗り固めた姿であられる。毛皮をまとった仮面

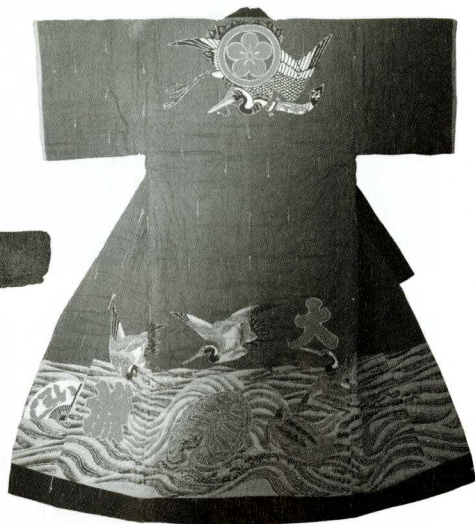
## 化粧

特集



子ども用のジャケット。  
縞模様の綿入れ  
(標本番号H235273)

中国の男性用長衣。  
裏地がとても派手な綿入れである  
(標本番号H170677)



綿入れの大漁着  
(標本番号H32014)



指摘もある。これらは、映画

この考えの延長線上のようにも考えられ

寒冷地で、動物脂肪を食料にも燃料にも使っているところでは、袖口や胸元だけでなく、ところかまわず脂でべとついている衣服をべつに気にもせず着ていることがある。それが文化なのだといわれると、割り切るよりないのだけれど。ともかく、このような綿入れは手入れがなかなかやっかいな代物なのである。にもかかわらず、日本では伝統的に綿入れの着物や襦袢などを愛用してきた。近世では、綿地で綿の入った衣服を小袖とよんで最上のもので、その小袖を二枚、三枚と重ねて着るのが一番の贅沢で、三枚襲といえは女性の礼装の基準だった。礼装は別にしても、冬のあいだは綿入れ、四月になると袷になり、梅雨

四月になると袷になり、梅雨

が上がるころに単衣にかわる。

明治中期からあと、初夏には

外国からの毛織物のセルヤ

ネルの着物が加わっている。

ところが、一九二〇年代に入ると、綿入れ廃止の動きが出てくる。洗濯ができないため

の不潔さもおおきな理由だが、もっと興味深い理由は、

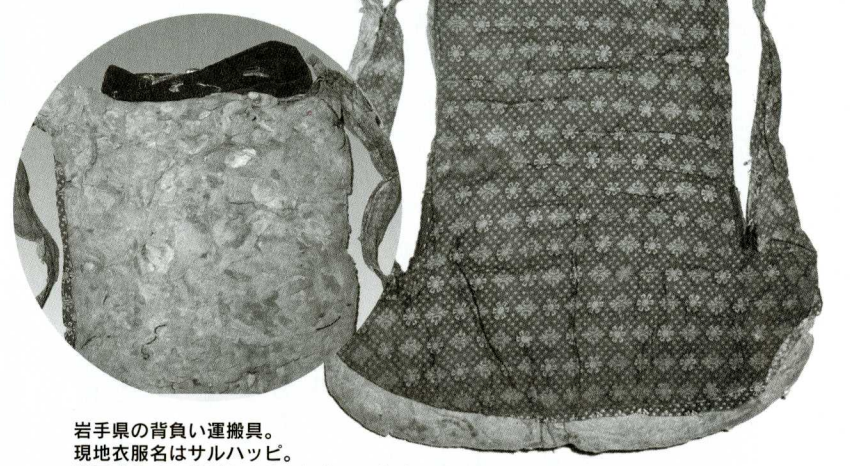
着物の袂や羽織にまで綿を入れて着たときの不格好さの指摘である。また、別の記録では、大正期のはじめには

三枚襲が稀になったという

# モノグラフィ

高橋 晴子(たかはし はるこ)  
大阪樟蔭女子大学教授  
本館客員研究員

## 綿入れ文化



岩手県の背負い運搬具。  
現地衣服名はサルハッピ。  
裏面全体の中綿がむき出しになっている  
(標本番号H17404)



小さな布をはぎ合わせた綿入れの長襦袢。  
手首の部分が細くなっている  
(標本番号H121062)

気がついてみると、冬の街を歩く人の姿に、このころはレザー・コートがめつきり少なくなかった。誰も彼もがダウン・ジャケット風の装いをしてるように思える。映画「バック・トゥ・ザ・フューチャー」の一作目のなかで、二〇年ほどむかしの時代にタイム・スリップしたマイケル・フォックス扮する若者に向かってその時代の人間が、「海難救助隊か？」と尋ねるシーンがある。一九六〇〜一九七〇年代には詰め物をしたパッテイド・ジャケットが、そう普通には街中で見られなかったためである。中綿を入れた衣服は軽くて暖かい。本物のダウンなどにこだわらなければ、レザーの二〇分の二以下の値段で手に入るといふ魅力もある。もっとも革ジャンに比べれば汚れも傷みも早い。

つと検索してみよう。(服装・身装文化データベース)の衣服標本データ群に検索語「綿入れ」と入力してみる。約三〇〇件がヒットした。画像をひとつひとつ見ていると、ひどく傷んで手に負えそうになりものも含まれている。たいていそういうのはぐんと匂うくらい垢染みていて、あちらからこちらからも中の綿が顔を出してしまっている。



着古された綿入れのおくるみ。  
手足が出せないひと続きのデザイン  
(標本番号H120834)

中国、日本ではむかしから、寒い季節には綿入れ衣料を手離せなかった。しかしこれは仕立てるのも面倒なら、清潔に着るのもたやすいことではない。とりわけ

や雑誌によって、西欧的なセンスのスリムな女性美の情報が増えてゆき、日本人の美意識も近代化された、というのが真相だろう。そして二枚襲も第二次大戦を越えることはなかった。この流れに並行するように、綿入れ着物は、あまり見え張る必要のないどころか丹前という、炬燵スタイルとして残ったのだ。

けれどもあらためて考えてみれば、それほどスリムさや体裁を気にする必要のない環境では、綿入れ衣料は軽くて、暖かくて、特別な材料を用いない限り経済的でもある。綿入れ着物が急速に後退していった一九二二年に、銀座資生堂の美容部長だった三須裕は、子ども洋服に綿を入れることを提案している。その時代は子ども洋服が人気で、少なくとも夏のあいだの東京あたりでは、着物を着ている子どもを見ることはめずらしいくらいなのに、一〇月の声を聞くころには山の手のいい家の子どもだけが洋服姿になってしまふ。三須はその原因を、良質の冬洋服の生地が当時はすべて舶来品だったので、結局洋服は高くつくためとして、それなら、下着にも上着にも外套にも綿を入れたらどうか、そうすれば和製で暖かい洋服を、安く着せることができる」と提案している。現代の、中綿入りブルゾンなどの

## 古城と河と博物館と

佐々木 利和 (ささき としかず)

本館先端人類科学研究部



ハイデルベルク  
民族博物館／ドイツ

である。

という悲しい歴史をもつハイデルベルク民族博物館であるが、通りのはずれとはいえ、ハイデルベルク旧市街でパレ・ワイマルとよばれる重厚で歴史的な建造物である。一八世紀初頭のこの建物から望む古城も河もきわめて美しい。この博物館の三階に館長のマルガレータ・バヴァロイ博士が住んでいる。たぶん世界一の館長公舎であろう。

われわれが訪れたとき、バヴァロイ博士が館内を案内してくださった。現在はアフリカの展示をおこなっ

この三月、民博の同僚とドイツの民族学系博物館を訪れた。今年は欧州も暖冬とかで、暖かい日々が続くロッカスの花が咲き誇っていた。ドイツの旅のはじまりはハイデルベルクである。

ハイデルベルクは古城と河と大学の街である。M・フエルスターの戯曲『アルトハイデルベルヒ』に涙した年配の人も多からう。それ故か日本人がもつとも憧れるドイツの都市である。この街の大学―ハイデルベルク大学はドイツでもっとも古い大学のひとつであり、東洋美術史研究所があり、日本美術史の教員もいる。ハイデルベルク大学は日本の大学のようにまとまったキャンパスがない。街のあちこちに研究所や教室がある。

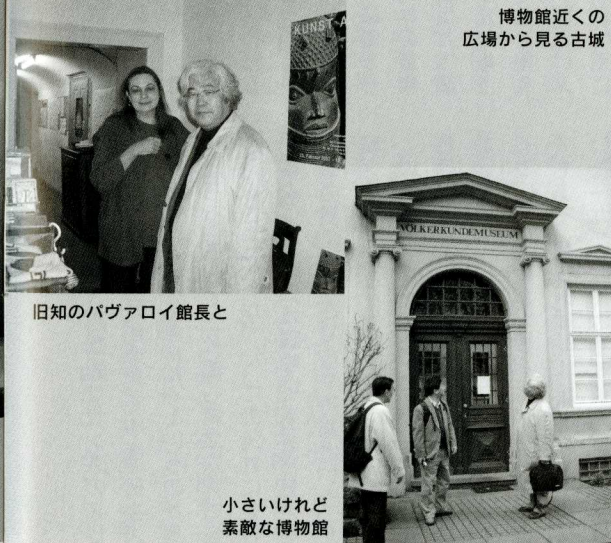
その街の中央通りはまた観光の中心でもある。古いホテルや教会があり、広場があり、古城が望める。古城といえばネッカー河にかけられたアルトブルッケン(古い橋)から見た城は絶景である。この景観を求めて人が来るといつても過言ではあるまい。

中央通りのはずれ近く。もう、観光客のすがたもまばらになったところにハイデルベルク民族博物館がある。正式には「ヨセフィーネ、エドワード・フォン・ポルトハイム基金ハイデルベルク民族博物館」という。一九一九年に設立されたこの博物館の創設者は結晶学者であるヴィクトア・ゴールドシュミット。彼はまた芸術における色彩という観点から多くの民族資料に注目した。とりわけ日本の浮世絵には深い関心をもち、積極的な収集に努めている。そのほかにも彼の視点はアフリカ、オセアニア、オリエント、東アジア、アメリカ、ヨーロッパにおよび、数多くの資料を集めた。しかし彼はユダヤ人であったため、ナチスの迫害を受け、自らの命を絶っている。彼と彼の基金もナチスによって莫大な損害を被り、今日に彼が遺したものはこの民族博物館のみ

ているが、近く日本美術の展示をおこないたいとおっしゃる。浮世絵だけではなく、この博物館の日本資料には民俗学的にもおもしろいものがある。どういふ展示がなされるか興味深いところではある。

ハイデルベルクはまたネッカーワインの産地でもある。民族学博物館を訪ね、古城にある薬事博物館を訪ねた。時差も加わって歩き疲れたからだをビールとワインが癒してくれたのはいうまでもない。さて、つぎはミュンヘンである。明日も暖かそうな予感のするハイデルベルクの夜空であった。

博物館近くの  
広場から見る古城



旧知のバヴァロイ館長と

小さいけれど  
素敵な博物館



博物館のアフリカ特別展の一部、  
ベニンの彫刻

## 盤上遊戯を楽しむ首長たち

化粧箱(蓋付き)(標本番号H62831) ガーナ共和国

阿久津 昌三(あくつしょうぞう)

信州大学教授

西アフリカ、ガーナ共和国のアシヤンティには精巧な技からなる真鍮細工がある。真鍮製の容器はクドウオとよばれている。化粧箱の蓋には首長たちが盤上遊戯を楽しんでいる。調査をしている折に王宮前の広場で盤上遊戯を楽しむ男たちに出会うことがあるが、駒を投げつけて応酬を繰り返す盤上遊戯は「博打」というものがそもそも神々のための儀式であったのではないかを想像させるものだ。盤上遊戯は西アフリカの森林地帯から中央アフリカを経て東アフリカに広く分布する。オワレとかオワリという共通語でよばれる。

首長たちは日傘をもつ従臣たちに日差しから守られている。日傘の「突」にはアシヤンティのことわざや警句などを意味するシンボルが裝飾されている。このシンボルは双葉だろうかサンコファとよばれる鳥だろうか。



双葉であるとする(王は)声名を集める」という意味になる。サンコファだとすると「過去を振り返ってはならない」ということわざを意味する。サンコファは「見返り鳥」というアシヤンティを代表する図像のひとつである。

化粧箱の胴にはワニが裝飾されている。ワニは「陸界」と「水界」を媒介することから、アシヤンティでは祭司のシンボルとして使われている。これは祭司の化粧箱であったのだろうか。胴から蓋にかけて梯子を上つたり下がったりする二人の人間が描かれている。アシヤンティでは「一人の人間が生まれることは一人の人間が死ぬことである」という死と再生の観念があり、「死の梯子」をモチーフにしたものである。この化粧箱は「生」と「死」の世界をみごとに描いたものである。





## みんなで「共有」

福井 栄二郎

(ふくい えいじろう)

本館外来研究員

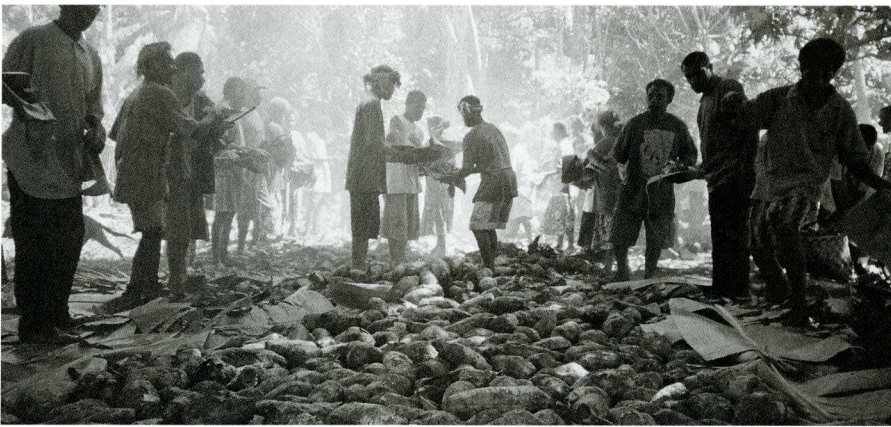
### ジャムを分け合う

激怒のはじまりはいちごジャムだった。その前日、日本から届いた小包のなかにあったいちごジャムは本当に貴重な「贅沢品」だった。わたしが調査している南太平洋ヴァヌアツ共和国の離島には、サトウキビのほかに、それほど糖分を含んだ食物があるわけではない。だからイタズラ好きのネズミたちに狙われないように、すぐに台所のちよつとした棚に隠しておいたのだ。翌日の朝食を心待ちにしながら。

けれども翌朝、その棚に手を伸ばすと、新品のはずのジャムの封が切られ、底が見えていたのではないか。もちろんネズミの仕業ではない。一足早くに目覚めた、ホームステイ先の「弟」のせいである。「早起きは三文の得」という諺はこの地にはないが、棚にジャムを発見した大食漢にとっては、まさに僥倖(ようひつ)だっただろう。「弟」の名前を大声で叫ぶが、彼は口いっばいにいちごの香りを含みながら、すでにどこかへ雲隠れしてしまっている。かわりに、そのわたしの声を聞きつけて「母」がやってきた。ひと通りわたしの話を傾けた後、彼女は申し訳なきように言った。ジャムのごちで怒るのはわかるけど、ここでは、みんなですべてを分け合うのよ。」

### 「アクロウ」の精神

この「分け合う」という考え方、この島の



結婚式で参列者に振舞われる大量のタロイモ

ことは「アクロウ(akroo)」というのだが、英語の「シェア」によく似ている。ピザを分け合うように、みなで何かを「分割する」ときにも使うが、あるひとつのものを、みんな「共有する」ときにも使用する。南の島の、日本とは比べものにならないくらい小規模社会で生活していると、この「アクロウ」

ウ」の考え方がとても重要になるときがあ  
る。子どもの学費を近親で「共有」したり、年  
老いた親の世話を兄弟姉妹で「共有」したり。  
要は助け合いの精神なのだが、もつと生活  
の根本に根付いた、義務のような感じでも  
ある。しかし、アクロウの考え方は「ちよつ  
と拝借」でも表裏一体。もちろん盗みは厳し  
く罰せられるけれど、「弟」のように他人の  
ものをちよつと食べたり、借りたり、使用し  
たりでぎてしまう。

だから「アクロウ」を考えると、もつひ  
とつ大事なものが、気前のよさ。たとえば結婚  
式の際、新郎の近親は大切に飼育してきた  
ブタを屠(ほ)り、大量のごちそうを気前よく参  
列者に振舞う。ごちそうをみんなで「共有」  
するのだ。たしかに大仕事ではあるが、この  
散財が自分たちの威信にかかわってくる。  
ケチと評されることが、この島では何より  
恥すべきことなのである。

そつだ、大事なものは、気前よく自分のもの  
を差し出して、みんなで共有することなの  
だ。「母」のことはに諭(さと)されて、わたしの怒り  
も収まる場所を見つけたようだった。たしかに、  
ジャムひとつで怒るとは大人げない。わた  
しもこの「アクロウ」の考え方に、いつも助  
けられているではないか。そつ反省する。し  
かし「共有」にしては、「弟」はジャムの分け  
前を取りすぎてないか？ よし、今度「弟」の  
ラジカセを勝手に「共有」してやろう。意地  
悪なわたしは、そんな「復讐」を考えて、ひと  
りほくそ笑むのである。

時	論
新	論
理	想 論

# アイヌ文化と学校教育、そして博物館

加藤 謙一  
(かとう けんいち)  
本館機関研究員

## 広がる、アイヌ文化に 学ぶ取り組み

三月二六、二七日の二日間にわたって、民博で公開フォーラム「日本における多文化教育―アイヌ文化の場合―」が開催された。アイヌ文化が学校教育のなかで取り上げられている状況を、その現場にさまざまな立場でたずさわる関係者の報告に基づいて考えるまたとない機会となった。

わたしにとって驚きだったのは、北海道とは遠く離れた東京や大阪の小学校でも、アイヌ古式舞踊をはじめとする伝統文化を題材にした教育実践が広がりをもって続けられてきたという事実であった。ひとつひとつの実践からは、アイヌ文化と出会ったときの感動を子どもたちにも伝えたいという教師の熱意が伝わってきた。そしてこの事実は同時に、フォーラムの主題ともなる重い課題をわれわれ参加者に与えることになった。

## 「文化の利用」という問題

報告者の一人、本田優子さんは、小学校でアイヌ文化教育にあてられる時間が減り続けるなか、自然と共生するアイヌの暮らしや伝統文化を学ぶ内容が残り、その歴史や現状を学ぶ内容が削減されている点を指摘した。そしてそのことがアイヌを「現代文明人と対置する存在として固定化し、アイヌの人

びとをわたしたちが同じ現代を生きているという共時的イメージをもつチャンス奪うことにつながっていると問題視した。

また、報告された学校の実践に対してアイヌの立場からコメントを求められた丸子美記子さんは、アイヌ文化に親しむ取り組みが一層広がることを願いつつも、「自然と共生するアイヌ」という部分だけを取り上げるような「アイヌ文化の利用」はやめてほしいと訴え、そのジレンマを吐露された。

確かに、フォーラムで報告があった実践の多くは、小学校低学年を対象にアイヌの伝統的な文化や自然観を踊りやモノづくりを通じて学ぶものだった。子どもたちにとってはアイヌ文化に親しむ貴重な機会となっているが、そうした経験を高学年で歴史や人権教育などにつなげていかなければ、丸子さんの願う「アイヌ民族に対する正しい理解」を深めていくことは難しいだろう。

## 求められる共時的まなざし

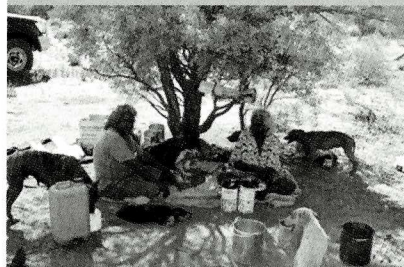
フォーラムでは、多文化教育の現場で「文化に所属する側」の立場を「文化を教育であつかう側」が配慮することの大切さと、むしろかきさを共有できた。この二者は、「異文化をその対象とする国内外の民族学博物館の展示においては、それぞれ「展示される側」と「展示する側」と置き換えられよう。民博はこれに「展示を見る側」をくわえた三者間の交流と啓発の場としての博

吹田市立北山田小学校ではアイヌの人を迎えて古式舞踊の実践がおこなわれた



丸子美記子さん  
(写真左: 関東ウタリ会長と  
本田優子さん(札幌大学教授)

物館、すなわち「フォーラムとしての博物館」をめざしている。我々は、展示に向けられる「見る側」のまなざしを、「展示される側」との共時的な状況にいざなう努力を今まで以上におこなっていく必要がある。さらには、展示との対話を通じて「見る側」に生まれる多様な経験や解釈をいねいにすくい上げること、そしてすくい上げたものを三者間の相互理解に活かすための場づくりを考えていかねばならない。



ブッシュで暮らす  
アボリジニたち

撮影・著作権 ムバンチュアギャラリー



ギャラリースタッフと寿司パーティー。  
刺身が無いのでネタにも悪戦苦闘



ギャラリー1階。  
2階は博物館



ブッシュでは週1度の移動販売がある。  
食料や衣類、日用品など何でもそろ

アリス在住の日本人は皆、仲良し



## 外国人 として 生きる

### 先住民アボリジニと共に、 赤土の大地に暮らす

黒田 智子 (くろだ ともこ)

Mbantua Gallery (ムバンチュアギャラリー) マーケティング・営業

#### 世界最古のモダンアート

「ここに住んでるんですか？」このような質問を日本人観光客の方からよく受ける。わたしが暮らしているのは、オーストラリアのド真ん中、アリススプリングスという人口約二万八〇〇〇人の小さな町だ。東京ドームの収容人数の半分といえ、どのくらい小さい町か察していただけだろう。

わたしはオーストラリアの先住民アボリジニが描くアボリジニアートをあつかっているギャラリーで働いている。初めてアボリジニアートを見たとき、感想が「何だこりゃ？」だった。というのも、とてつもなく抽象的な絵だからだ。点や線で描かれる絵が、まさかそれぞれ意味をもち、ストーリーがあるなど想像もしなかった。このアートについてもっと知りたい、どんな人が描いているのだろう、どんな歴史があるのだろう、そこからわたしのアボリジニアート人生が始まった。

ここで簡単にこのアートをご説明しよう。先住民アボリジニは文字をもたないので、はるかむかしから大地や岩に記号のような模様を描き、意思の伝達を図ってきた。例えばここに水場があるよなどの情報から、法や掟などさまざまな事を先祖代々伝えてきた。その模様を独特で面白いと思ったイギリス人の美術教師が、キャンバスに描くよう指導したのが

一九七一年のこと。まだ三六年しか経ってないのだが、今やアボリジニアートは世界が認める「世界最古のモダンアート」となったのである。

#### 現地ギャラリーで働く理由

アリススプリングスのギャラリーで働いているには大きな理由がある。アリスの周辺には、アボリジニの人びとが暮らす「コミュニティ」とよばれる村が多く点在しており、わたしが勤務しているムバンチュアギャラリーは、ブッシュで暮らすアーティストたちから直接絵を買って付けているので、彼らとコミュニケーションがとれるという大きなメリットがある。日本人のわたしは、もっている情報量が絶対に少ない。日本でのOL時代に学んだ「仕事は現場で覚える」という信念のもと、アリスで働くことを決意したのである。まず、彼らの生活、文化を知らない、絵を理解できないし、売れないと思っただのだ。

もちろん、仕事では英語を使う。わたしのお客様は日本人だけではない。日本人が来る事なんて稀である。スタッフは全員オーストラリア人だし、アーティストと話をしようと思っても、アボリジニ語はまるで理解不能で宇宙人語のよう。しかし、彼らの絵に、注釈を入れた保証書は英語で作成しなければならず、アボリジニ

二語も理解しなければならぬ。どちらも中途半端なわたしは、他のスタッフの二倍、三倍勉強しなければならぬ。決して若くないわたしの脳は、むかしより確実に硬くなっており、悪戦苦闘の毎日である。しかし、日本人のわたしがこの地で職を得て、解雇されずにいるには、そのくらいしないと追いつかない。

お客様は世界各国からいらつしやるが、オーストラリア人も多い。ギャラリーで勤務を始めたころ、自信の無さから「日本人のわたしがオーストラリアの文化のものをオーストラリア人に売って良いのだろうか？」と、ずっと自問自答していた。もし、あなたが三味線を買いに楽器屋に行き、接客してくれた人が外国人だったら買うだろうか？自分勝手に出したわたしの答えは、「その人が商品知識もあり、仕事に情熱をもち、商品に愛着をもって販売していたら、国籍は関係なく買うのではないだろうか」だった。オーストラリア人のお客様から「なぜ、日本人のあなたがこの仕事をしているの？」と聞かれることがある。そうすると、ひるむことなくわたしは、アボリジニアートに対する熱い想いを語り始める。すると、大半の人は「それは素晴らしいことね、あなたの母国である日本にも是非この素晴らしい文化を伝えてちょうだい」と、ニッコリされるのである。

アーティストたちともたいぶ交流を図

れるようになった。彼らは町の真ん中でわたしを見つけると「トモコー」と人一倍大きい声で呼ぶ。とても嬉しい瞬間のひとつだ。彼らにすればわたしは外国人。発音し慣れない名前を一生懸命呼んでくれる。日本についても興味をもってくれる。わたしもしっかり彼らの文化や言葉を学ばなければ、と改めて心に誓うのである。

#### 情熱とトライの精神で

去年、初めて彼らのおこなうセレモニー(儀式)に招待された。ブッシュに出向き、日が暮れると長老が歌い、女性たちが踊る。「オマエも一緒に歌って踊れ」と言われ、見よう見まねでトライ。わたしが踊るとなんだか盆踊りのようだ。人懐っこい子どもたちが一生懸命教えてくれる。儀式が終わった後、長老からNo.1ダンサーと称され、明日もまた来いと言われた。やはり実践あるのみである。恥ずかしがっては何も得られない。外国で暮らすのは難しいと思っている方は多いと思うが、情熱とトライの精神があれば結構乗り切れるものである。言葉はもちろん、文化や習慣は違って当たり前。要はそれをどう受け止め、吸収するか、だと思っ。そんな偉そうなことを言っわたしも、日本食は恋しくて仕方がない。

ポルトガルのギター。  
 ヴィオラ・カンパニーサ(上左)  
 ヴィオラ・トゥエイラ(上右) (標本番号H237192)  
 ギターラ・デ・リスボア(下) (標本番号H237191)



はっちゃんぶんちゃん  
 (別府・竹瓦温泉)

はっちゃんが  
 愛用していたギター

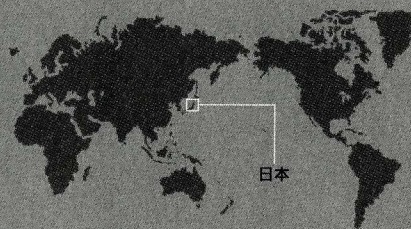
## ギターに刻まれた歴史

地球を  
 集める

笹原 亮二

(さはら りょうじ)

本館民族文化研究部



先日、一本のギターの寄贈を受けた。それは大分弾き込まれたクラシック・ギターで、ボディの至るところに大小たくさんの傷がある。サウンド・ホール付近はピックで削れて木肌が露出し、ガム・テープを貼って更なる摩耗を防いでいる。ブリッジにはピックを付けた紐がガム・テープで貼り付けられ、ボディの縁もガム・テープで補修してある。ヘッドの大きな割れ目は接着剤をたっぷり塗って補修され、ネックの側面には紙片を貼り付けてポジション・マークを自作している。ネックの根元とボディ尾部にねじ込まれた金具には、少々くたびれたストラップが付いている。

とまあそんな具合で、このギター、何ともいえない雰囲気を感じ出している。

### 別府の流し

このギターは、別府温泉の流しのギター弾きの「はっちゃん」(上野初さん)が長年愛用してきたものである。彼は現在も、アコーディオンの「ぶんちゃん」(日浦文明さん)とコンビを組んで、月二回おこなわれる地元NPO竹瓦温泉倶楽部主催のイベント「竹瓦・夜の路地裏散歩」で演奏を披露している。

はっちゃんは一九二六年広島に生まれ、幼いころに両親と共に別府に移り住んだ。その後、満州に渡り、しばらく働いた後に軍隊に入隊した。終戦後は三年間のシベリア

一時は警察の肝いりで「別府メロディアンズ防犯協会」を組織し、六組編成で毎晩飲屋街の隅から隅まで演奏して歩くほど隆盛を誇った別府の流しも、現在、現役は彼ら二人のみとなった。

### 記された文字

はっちゃんのギターを改めて見てみると、前述のような、別府の流しの人びとが経験してきたこの数十年のあいだの暮らしが、各所に刻み込まれていることに気付く。ギターに付いた大小さまざまな傷は、屋外の演奏で雨に濡れたり、狭い飲屋のなかで柱や壁にぶつかったりという、流しならではの演奏の様相を伝えている。手製の紙のポジション・マークも、急なリクエストや客の伴奏の際のキーの変更に威力を発揮したのではないだろうか。

はっちゃんのギターには、そうした別府という地域で生きてきた人びとの小さな歴史と同時に、もう少し大きな歴史の流れも影を落としている。二〇世紀初頭にマンダリンとともにヨーロッパから日本に移入されたギターは、一九二〇年代末に古賀政男によって、浪曲や三味線をベースに大衆的な流行歌謡にとり入れられた。戦後それは、演歌や歌謡曲のギターの演奏に受け継がれ、日本の大衆的なギターの受容として定着していった。はっちゃんのギターには田端義男のサインと「古賀メロディー」

抑留を経て帰国、別府に戻った。戻ってから、土木作業員やタクシー運転手などさまざまな仕事を経て、一九五〇年代中ごろから流しでギターを弾き始めた。ギターは、最初にほんの少し経験者から手解きを受けたが、ほとんど独学でマスターした。

かつて別府の流しは、ギター二人にアコーディオン一人の三人一組で、一人が歌うというかたちで演奏していた。組ごとに飲屋街でめぐる範囲が決まっていた、そこを演奏しながらめぐり、声が掛かると店に入って曲を演奏した。もちろん客のリクエストにも応じた。はっちゃんは、流しを始めて間もないころはリクエストされても弾けないこともあり、そんなときは悔しくて、家に帰ってから、寝ている家族を起こさないように、布団を被って必死で練習したという。そんな彼のレパートリーは数千曲にもおよんでいる。

一九八〇年代にカラオケが登場すると、彼らが歌や演奏を聞かせるのではなく、客の歌の伴奏をするようになった。カラオケ機器を備える店も増えて、次第に流しの仕事が減っていった。その一方で、温泉ホテルの宴会に呼ばれるようになった。一晩に何カ所も掛けもちするほど忙しいときもあり、流しの仕事の減少が相殺されて収入を確保することができた。その後、カラオケの普及や温泉地に対する人びとの嗜好の変化などで、彼らの演奏の需要は更に減少していった。

の文字が見える。彼は田端義男も古賀政男も大好きで、彼のレパートリーは、大部分を彼らの歌を初めとした演歌が占めている。ギターに記されたこれらの文字は、彼のギターと演奏が、日本におけるポピュラー音楽や大衆文化の歴史と密接な関係を有していることを示している。

### 日本のギター、 ユーラシアのギター

今回のギターの収集は、人間文化研究機構の連携研究「ユーラシアと日本：交流と表象」の一環でおこなったものである。このプロジェクトでは、一昨年ポルトガルのギターに関する資料収集をおこなった。ここでは六弦ではない多様なギターが各地で見られ、同じ大衆的なギターの受容・定着の様相とはいえず、別府の流しとは大きく違っていた。両者のギターの受容・定着の違いをユーラシアという視点から眺めると、それが、ユーラシア西端のポルトガルと東端の日本がそれぞれ経てきた歴史の違いといかにかかわっているのかといった、更に大きな問題も浮かび上がってくる。

たかがギターと侮るなかれ。目を凝らせば、ギターをめぐるさまざまな歴史をそこから読みとることが出来る。

因みに、はっちゃんのギターと演奏は、現在準備中の、民博の新しい音楽展示で紹介する予定である。

# 生きもの 博物誌

【サバクバツタ】  
ブルキナファソ



## サバクバツタの異常発生

石本 雄大  
(いしもと ゆうだい)

京都大学大学院  
アジア・アフリカ地域研究研究科

決定的な被害を与えたためだろう。

### 食われたもんはしよがねえ

村の住民は農耕・家畜飼養および採集をおこない、収穫にも出かける。サバクバツタ到来の初日には、人びとはイネ科雑草の種子の採集をおこなっていた。バツタが飛来しはじめる子どもたちはひどくはしゃぎ、サンダルで叩こうと、大声をあげて追い掛け回した。しかし大人は男女とも、畑への大群の降下をちらと眺めた後は、採集作業に黙々と打ち込んでいた。

では作業後に、人びとがサバクバツタの駆除や情報収集に奔走したかというところではない。男性は正午過ぎから午後三時ごろまで作業をし、その後は日ごとと同様に、作物の状態の確認に自らの畑を訪れ、すぐに帰宅した。また、女性は夕暮れ後に作業を終え、家に直帰し、晩飯を用意した。そしてその日以降も、サバクバツタが飛来した際に対処することは特にせず、採集を続けていた。

およそ一カ月半後、採集作業やそれに続く農作物の収穫も終了したところ、人に会うたびにサバクバツタによる被害について尋ねてみた。ある男性は「たった三日分しか主食作物が収穫できなかった。まあ、食われたもんはしよがねえ」と言っていた。被害の程度は畑によって幾分異なっていたが、残念そうではあるが吹っ切れたこの態度は多くの人に共通しているように思われた。

### 淡々と受けいれる姿勢

ヤギ・ヒツジなどの小家畜数頭が行方不明になった

不意に目の前を横切った赤い色につられて顔を上げると、バツタが群れをなして北の空を飛ぶ光景が目に入り、飛び込んできた。赤黒いバツタは次々と畑に飛来し、トウジンビエの穂や葉に群がった。体長五センチメートルほどのバツタが鈴なりにぶら下がり、わたしは赤い畑にきたのではないかという感覚にとらわれた。およそ一時間後、群れはようやく南へと去った。四方から聞こえていた羽音がなくなると、村は驚くほどの静けさに包まれた。空を見上げると、羽に乱反射した光と赤い点が地平線まで無数に続いていた。そして耕地には、随所に食い荒らされた穂と葉脈が剥き出しになった葉が残っていた。

サバクバツタは、北西部アフリカからサヘル地域におよぶ広範囲で異常発生した。この大発生による、村の農作物への被害はどの程度であったのだろうか。二〇〇二〜二〇〇五年の主食作物トウジンビエの収穫量を六つの畑について比較したところ、二〇〇四年の収穫量は大幅に減少した。この年は降水量が平年の二分の一以下と旱魃年でもあったため、減収がどこまでサバクバツタによるものか推計することはできなかった。しかし、二〇〇五年と比べるとやや貧弱ながらも、サバクバツタが襲来した直前には、トウジンビエは穂を出して種子をつけはじめていたことが確認されている。それにもかかわらず、収穫量がここまで激減したのはやはりサバクバツタが

際には、数人の男性が方々へ搜索に出た。足跡や目撃証言を手がかりに探し回るのである。このとき彼らは血相を変えて必死になつており、サバクバツタの発生や被害に対する淡白で諦観的な態度とはまったく異なっていた。被害額はバツタによるものの方がはるかに大きかったにもかかわらず、何故こういつた態度の違

いが生まれるのであろうか。それは彼らの認識の違いから生じたのではなからうか。サバクバツタの大発生は不可避な自然災害であり、他方、家畜がはぐれたことは解決しうる問題であるということだ。サヘル地域では降雨が不安定なため、今回のようなバツタの大発生に限らず、深刻な旱魃が起

こることもある。自然災害が頻繁に起こる不安定な環境下では、現実起こったことを淡々と受けいれる姿勢こそが、生活していくうえでもっとも大切な資質であるかもしれない。

調理をする女性たち



トウジンビエ畑



サバクバツタを捕まえた子ども

トウジンビエの穂や葉に群がるサバクバツタ



### サバクバツタ【サバクトビバッタ】(学名: *Schistocerca gregaria*.)

植生が枯れ始めると、それまで単生であったサバクバツタは、食事・移動をともにする集団を形成する。単生のときにはバツタの体色は薄茶色だが、群生化したものは羽・腹部が赤色(未熟な成虫)、黄色(成熟した成虫)になる。大群は日中に5~200キロメートル移動する。この群れは数百キロ平方メートルにまたがるほど大規模であり、1キロ平方メートルに2000万匹から1.5億匹のバツタが存在するという。





## 水浴びの作法

飯國 有佳子 (いいくに ゆかこ)

本館外来研究員

### 水浴びは陽が傾いてから

ちょうど一〇年前、ビルマ(ミャンマー連邦)の首都ヤンゴンで働いていたわたしは、ある人類学者から自分の調査村に来てみないかと誘われた。人類学に興味をもち始めたころだったので、ふたつ返事でその話に乗し、四月の休暇を利用して村に行った。四月中旬に新年を迎えるビルマでは、約一週間のあいだティンジャンとよばれる水かけ祭りがおこな

れる。村でのティンジャンの様子と新年儀礼が見られることを、わたしはとても楽しみにしていたが、行った時期が悪かった。

四月は一年中でもっとも暑く、そのうえ、村は国内有数の乾燥地帯にあった。気温は四五度を軽く超え、吸う息も吐く息も熱く、うちわで涼をとっても熱風しかこない。まるでサウナのなかにいるような暑さに耐えかねて水浴びをしようとする、「こんな暑いなか、水浴びをした

ら死ぬよ。陽が落ちてからにしない」と、村長の奥さんに止められた。後に自分がフィールドワークをするようになってからわかったことだが、これは心臓発作や脳溢血(のういっけつ)を起こさないための知恵のようだった。

それから七年後、わたしは別の村落で調査することになった。水浴びでまた人びとに取り囲まれるだろうと覚悟はしていたが、以前ほどではなかった。村の親しい女性に「以前、他の村で、わたしが水浴びするのを大勢の人が見に来たね」というと、「きつとその村の人は、あなたが日本人だから『日本流の水浴び』をすることで思っただけでしょう」と笑いながら教えてくれた。このときはじめて、かつて人びとが興味津々に水浴びを見に来た理由がわかったのである。

### 日本流水浴び

陽が傾き始めるころ、村人たちは河や池、井戸など戸外の水辺へと向かい、水浴びをする。特に仕切りがある訳ではないため、裸にはならない。女性の場合、ロンジーとよばれる腰巻を胸まで上げて巻きなおし、その上から水を浴びるのが正しい作法だ。時折、「裸にならずにどうやって体を洗うの?」と聞かれることがあるが、ロンジーの上から石鹸を付けて布も一緒に洗ってしまえば、洗濯にもなつて一石二鳥である。

わたしたちもロンジーをまとって水浴びしていると、徐々に人が集まり、最終的に三〇人以上の人だかりができた。他人の家の井戸を借りていたため文句は言えないが、さすがに若い男性が三メートルほど先の地面にしゃがみ込み、手にごを乗せて見物するのには閉口した。「そんなにめずらしい?」と、立ち去っていくのを期待しながら聞いてみると、彼は深くうなずくだけで、結局最後までそこにいた。現地の人びとの営みを観察しているはずの人類学者が、じつはいちばん観察されているというのによくある話だ。しかし、この村の人びとは件の人類学者の存在にすでに慣れており、あか

る。村でのティンジャンの様子と新年儀礼が見られることを、わたしはとても楽しみにしていたが、行った時期が悪かった。

「日本流水浴び」とは、ビルマ語で「素っ裸で水浴びする」という意味だ。何故「日本流」が「素っ裸」になるのかというと、第二次世界大戦中ビルマにやってきた日本兵が、素っ裸になって水に飛び込んだからだという。「日本流水浴び」ということばができるほどだから、日本兵が水浴びをする様子は、彼の地の人びとにはよほど衝撃的だったのだろう。たしかに「日本流水浴び」ということばは、日本兵の粗野で野蛮な振る舞いを示す好例としても出されることもある。

### よくない思い出は水に流す

ところが、調査のあいだ、わたしは面と向かって当時のことを非難された経験がない。飢えた日本兵に食べ物をあげたという話や、軍票(ぐんひょう)や日本刀を何とか換金できないかと相談された程度だ。ビルマは比較的早い段階で日本政府の戦後賠償を受け入れていることもあり、戦地になった他のアジアの国々に比べ、対日感情は悪くないものと思いついてきた。

るところなことがないから、近づけるなつて言っていたんだもの。でも、そう言っていたおじいちゃんの冥福を祈りに、ずっとあなたが来てくれていたなんて、妙なめぐりあわせだね」と、彼女は笑いながら言うのだ。

ビルマの人びとときあつていると、彼らは過去のよくないことは水に流し、

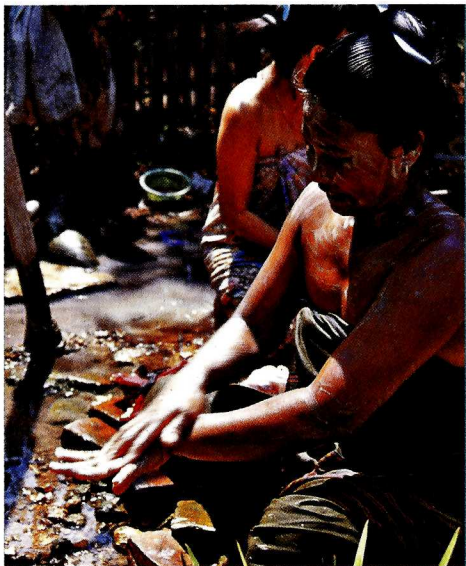
よい点だけを思い出として残そうと努めているように感じる。がしばしばある。たとえ水に流せない場合でも、怒みごとを直接当事者に言うことはあまりない。それが悪徳となつて、自分の身に降りかかるのを避けるためだ。むしろ、もはやかわり合わないことで忘れるか、因果応報の結果と解釈して自分の身に引き受

ける。亡くなった彼女の父も、粗野な日本人に対する悪い記憶を封印するために、わたしを避けていたのだろう。「日本流水浴び」に込められた真意を理解するには、長い時間がかかった。ことばの奥にある、語られない微妙な何かを感じとるには、十分な経験が必要だ。

そんなとき、村で七三歳の男性が亡くなった。その家は村のメインストリートに面していたが、わたしは一度も立ち寄ったことはなかった。弔問には誰が訪れてもよいのだが、それまで懇意でなかったので、念のため、わたしはその家の親戚の女性と一緒に家に向かった。最愛の父を亡くした娘さんは、悲しみのあまり話ができる状態ではなかった。そんな彼女に周囲の人びとは「そんなに悲しんだら、お父さん心配であの世にいけないよ」と言い、父の死を受け入れるよう説得していた。

お坊さんを自宅に迎えて初七日の儀礼を済ませ、食事をとっていたときのことだ。毎日通ううちに親しくなった彼女に「おじいさんの生前の姿を、わたし思い出せないのよ」と聞いてみた。すると「そりゃそつよ。あんたが覚えてる訳ないわ。おじいちゃん、日本人を家に近づけ

体を洗う女性



旧年の汚れを洗い流すために、水をかけ合うティンジャンという祭りがおこなわれる



ティンジャンに、年配者の頭や身体を洗ってあげると、功德(くどく)をえられる



村の外は見渡す限りの水田

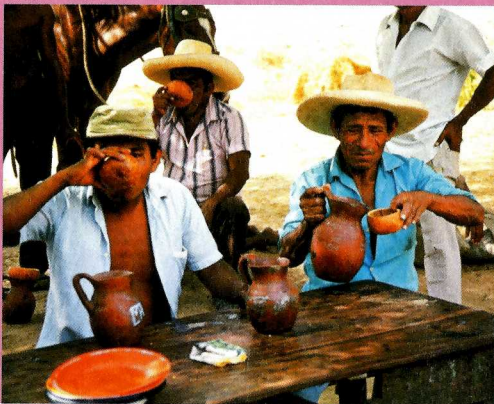
# 開館30周年記念

## みんなく ウィークエンド・サロン 研究者と話そう

さまざまな研究者から、直接ナマの話を聞く「研究者と話そう」。

7月は中旬からスタートします。夏休み、民博で博物館三昧の一日を過ごしてみませんか。

トウモロコシ酒を楽しむ人びと  
(ペルー北海岸)



■時間：14:30～15:30(予定)  
■参加費：無料(ただし、観覧券が必要)

\* 毎週土曜日は、小学生・中学生・高校生は無料で観覧できます。  
ただし、自然文化園を通行して来館される場合は、自然文化園の入園料が必要です。

実施日・話者・話題・場所

7月15日(日)  
関 雄二 (先端人類科学研究部教授)  
トウモロコシ酒で酔う  
於:アメリカ展示

7月16日(月・祝)  
横山 廣子 (民族社会研究部准教授)  
雲南・絞り藍染めの村の、その後  
於:中国地域の文化展示

7月22日(日)  
園田 直子 (文化資源研究センター教授)  
展示場の環境づくり ームシ対策編  
於:展示場内休憩所

7月28日(土)  
ピーター・J・マシウス  
(研究戦略センター准教授)  
ニュージーランドと植物の世界  
於:オセアニア展示、アメリカ展示、日本の文化展示

※以後の予定は、ホームページ等でお知らせします。

### 編集後記

昆虫に興味をもつのは、狩猟本能や知的好奇心ゆえだけでない。端的に、そこにエロスを見いだすからだ。昆虫少年上がりのわたしは、そう信じている。じつさい、うっとりさせるほど美しい肢体をもつ虫もいるのである。彼らその美を自覚しているかどうか、また日頃、美への努力を怠らないかどうか。それはともかく少なくとも人間にとって、身体を飾って集団を表現する文化は普遍的で、各人の個性もそのなかで主張されてきた。

しかし、近年は世界規模の情報化とコマーシャルイズムの進展で、美的基準も猛烈な勢いで近似化しつつあるように見える。たとえば、東南アジアではお歯黒の習慣は今にもなくなりかけ、若い女性たちは、都会のデパートで大手メーカーの化粧品にあこがれている。それでも先進国のなかだけでさえ、美の基準がなかなか画一化してしまわないのは、情報化の進展が、同時にめまぐるしく流行の移り変わりをも作り出しているからだろう。また、美への意志、欲求には限りがないからだろう。

美の追求は、たやすく消費の向上と結びつく。芸術を思い描いても、禁欲と耽美の両立は困難に思われる。いや、両者に折り合いをつける発想、それがスロービューティなのではないか。そう考えると、これが、性差、年齢、世代、地域など、社会の関係性を再考させる新しい美の哲学に思えてくる。  
(樫永真佐夫)



### 交通案内

- 大阪・千里万博記念公園内
- 大阪モノレールで「公園東口駅」・「万博記念公園駅」下車徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車徒歩約15分(茨木方面から1時間1本程度、日本庭園前駐車場乗り入れのバスがあります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください)。
- 自家用車の場合は、万博記念公園「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

月刊



次号予告/8月号特集  
くれる

2007年7月号

第31巻第7号通巻第358号  
2007年7月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館  
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1  
電話06-6876-2151

発行人 朝倉敏夫

編集委員 池谷和信(編集長) 樫永真佐夫  
久保正敏 庄司博史 山中由里子

協力 財団法人 千里文化財団

制作 株式会社博報堂

製版・印刷 アサヒ精版印刷株式会社

- 本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係へ
- 本誌掲載記事の無断転載を禁じます